

環鳥海 フォーラム 「これからの鳥海山観光を考える」

閉会の挨拶

司会

定刻になりましたので只今より開催させていただきます。今日は環鳥海秋田山形県際間連携フォーラム「これからの鳥海山観光を考える」にご参加いただきありがとうございます。それでは主催者を代表いたしまして山形県庄内総合支庁総務企画部企画振興課長から挨拶をいただきます。

企画進行課長



ご挨拶を申し上げます。今日は庄内地区のみならず沢山ご参加いただきありがとうございます。また、本日基調講演を行って頂きますパネラー先生方お忙しいところお越しいただき本当にありがとうございます。宜しくお願ひしたいと思います。鳥海山を中心に秋田県由利地域、山形県庄内地区は海岸部、山間部ともに歴史、文化、自然環境、資源に恵まれてきて従来から環鳥海として盛んに交流が行われていると言うことで平成 13 年度からこの流れを大きくしたいと言う事で活動して参りました。また去年は秋田山形県際間連携事業として広域観光、自然環境などの色々検討を進めてきた訳です。この中で山形県につきましては今後も 10 年間の地域計画を作成中です。その中で今回、これまでの経験を元に色々な先生方からご意見を頂きまして地域のグランドラインを作成中でございます。本日、藤原先生より基調講演が行われますがディスカッションで各先生方のお話を頂きますが、それを参考に地域住民の皆さんのご協力を宜しくお願ひ致します。最後にシンポジウムが素晴らしいものになります様に祈念いたしまして、また皆様の今後のご活躍を祈念いたしましてご挨拶に変えさせていただきます。今日はありがとうございました。

司会

ありがとうございました。それではさっそく基調講演に移らせていただきます。今日は秋田県を中心にご活躍の藤原優太郎先生にご講演をお願いしております。藤原様におかれましては秋田県河辺町のお生まれで、鳥海山をホームグラウンドとして現在は山岳自然のライターとしてご活躍されており、秋田県や山形県の自然の著書を多く出されております。本日の演題は「鳥海山の魅力、自然と歴史」それでは藤原さん宜しくお願ひ致します。

基調講演 「鳥海山の魅力～自然と歴史～」

藤原

只今、ご紹介に預かりました藤原優太郎です。今日は鳥海山のことについて少し日頃私が感じている事など色々お話しさせて頂きたいと思っております。これから鳥海山のことについてお話しさせて頂きますけどその際話の中に出てきます話の流れに、皆様にイメージをつかんでいただくために先ず最初にスライドの写真を 10 点ほどご覧になって頂きたいと思ひます。まずはこれで鳥海山のイメージをつかんでいただきまして、それからお話し聞いていただければありがたいと思ひます。先ず最初の写真の方お願ひ致します。写真説明のお話し申し上げませんが先ず鳥海山のイメージをつかむためにご覧になって下さい。笹が岳から見た鳥海山の姿です。これは笹が岳。これは鳥海山を代表するチョウカイフスマです。きれいですね、シーズンになりますと沢山の人がいらして



おります。鳥海湖、古い噴火口ですね。これは新山、鳥海山の最高峰で、2,236m あります。あそこに赤い小屋が見えるのが神社ですね。これは矢島側外輪から見た鳥海山の側面になります。非常に鳥海山らしくない峻しいアルペンのような景観を見せる所です。これは日本海に映った影鳥海です。次は西日を受けて鳥海町側の東側の方に出た夕方の影鳥海です。このブナ林は象潟町のブナ林の姿です。一番太いブナを移したものです。写真は以上です。今ご覧頂いたものを心の中において、これからの話を聞いていただければありがたいです。今日の話の中身としてですね、皆様のお手元の資料の中折の方に「鳥海山の魅力～自然と歴史」という話の目次の様なものを用意いたしました。この内容に沿って話をして行きたいと思います。最初に話に入る前に私自身の鳥海山の関わりについて申し上げますと、私が初めて鳥海山に接したのは昭和 35 年です。高校に入ってすぐ山岳部に入ります。合宿などが始まったわけですがその 35 年の春から今まで四十数年間、ただ一度も鳥海山から離れた事はありません。ずっと鳥海山と関わって来ておりまして自分を育ててくれた大きな存在ですと申し上げておきます。今日の話の最初ですが、でもまず鳥海山の山の成り立ちと書きました。その中で海峡を渡ったと書きましたけれどこれはどういう事かといいますと日本の有名な詩人で安西冬衛の春という題の詩がありまして、てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った、たったこれだけの詩があるんです。韃靼海峡を渡っていった一匹の蝶、私は何か凄まじい生き方を感じまして、その言葉に色々考えてみました。実際彼はこれを見て書いたわけではないんですけど、その人のイメージで書いた詩なんですがこの蝶というのは鳥海山の中腹にあります筈が岳という今日最初にお花畑の写真出ていましたけども、筈が岳の周辺の草原にいつ行ってもひらひらしてるベニヒカゲという蝶々があります。ベニヒカゲは高山蝶です。この蝶々だけではありませんけども、氷河時代に大陸から渡って来た蝶です。海峡を渡って北海道に入ってきたのだらうと思った訳です。このベニヒカゲが非常に自然環境のいい、鳥海山の自然を自由に飛び回っていると言う凄まじさに非常にいつも感動を受けるんですけども、このベニヒカゲというのは全体的に焦げ茶色っぽい所に星の斑点が並んでいるんですが、ジャノメ蝶の仲間なんです。このベニヒカゲという蝶はカヤツリグサやツゲの仲間の植物を主食にしておりまして、そういう植物が豊かな場所にしかも非常に寒冷な環境に住む非常に厳しい場所に住む珍しい蝶です。このベニヒカゲは鳥海山におりますけども北海道にもおります。それから南アルプスの方にもおります。それから上信越の山々にも認められるそうなんですけども貴重な蝶なんです。蝶のマニアの人たちにとっては非常に喉から手が出るほど欲しがらる蝶でしてそのマニアの採集にとって数が減っている所もあるそうなんです。そういう事で山形県などでは天然記念物に指定して保護して行こうと。このベニヒカゲ、鳥海山では沢山見られます。鳥海山の他に奥羽山脈の山がありまして非常に数多くいて環境の厳しい所に子孫を残すと。鳥海山の様な高山で生活、正に山の妖精のような感じがするわけです。ベニヒカゲは実は氷河時代の生き残りなんです。依存植物も多いですけど。そういうものが鳥海山にも結構、数が多いですね。氷河の話なんですけども鳥海山の場合も氷河時代からの名残りと言いましょか、ご存知のとおり冬の間鳥海山は多量の降雪があって春まで物凄い深い雪に閉ざされます。半年雪に閉ざされる山なんですけれども、この鳥海山の場合標高 1,000m 以上のエリアになりますと年間降水量 12,000ml 以上の降水量、これは世界でも最大級の降水地帯と言われてます。非常に降水量が多いこれは冬季間の降雪が多いわけです。鳥海山の雪の多さというのは春先でも多い時には 30m を超える積雪地帯もある、吹き溜まりが出来てそれが遅くまで残る所そこが吹き溜まり氷河というものが発生しているというふうに言われています。今言いました様に鳥海山は非常に降水量が多い山だと言いました。山のあちこちに豊富な残雪、場所によれば万年雪、雪が育ててくれる数多くの高山植物があるわけです。多くの積雪が多いためにどういう良い相関関係があるかと言いますとご存知の様に鳥海山は花の山、高山植物の宝庫としても全国的にも知られた有名な山でございます。この鳥海山の貴重な花々を見たいがために全国各地から沢山の人が訪れるようになったんですけどもここは朝日連峰の朝日岳や月山などと同じように日本海側の多雪山地であります。雪が多いために他の山で見られる椴松など全体的に鳥海山には全針葉樹がない。例えば八幡平でも岩木山でもブナ林の上に針葉樹林体があります。これが八幡平から秋田駒ヶ岳にかけそれから南に下がって、秋田駒ヶ岳から秋田栗駒山まで針葉樹がない。鳥海山もありません。あと蔵王に近付くまで針葉樹がない、だからそれだけ雪が多いという事、やはり雪の多い少ないによって針葉樹が欠出する。その針葉樹の代わりにブナ林からハギなどの低木林が続く、広大なお花畑を作っている訳です。鳥海山は東北の中でも多様な自然を目にすることが出来る貴重な山で、しかも標高は最高峰 2,236m、東北の最高峰といってもいい山だと思います。今、東北の最高

峰という群馬の燧岳が最高峰と言われてはいますが、鳥海山は間違いなく東北の最高峰だと言えます。鳥海山の今言いました多様な自然、鳥海山の自然を特徴づける現象として大きな特徴が4つ程あります。それは何かと言いますと一つは今申し上げました、針葉樹体が多量の積雪の為に存在して行けない、これが一つですね、二つ目として稜線の斜面上に、思うに冬の季節風が強い西風、北西の風を受けた反対側ですね、東南方向から南方向に稜線の風下側の山腹斜面、そこの積雪が極端に多い。これは20mから過去多いときは50mにも達する場所があったくらい積雪が多い、それから三番目に低木地帯の存在。これは残雪の深さ、規模や地形に対応したものであります。そういう場所が沢山見られます。高山体に見られるんですが、だから鳥海山を偽低木地帯と呼ばれているんです。それから四番目として鳥海山は鳥海フスマ、鳥海アザミに代表される固有種がある。これは鳥海山が2,000mちょっとの高さの山であるにしても日本アルプスの3,000mの山々に引けを取らない素晴らしさが沢山ある。こういう事から鳥海山は誇るべき大きな特徴ではないかと。そして、こういう特徴づける自然現象がまだいい形で見られる鳥海山です。山の中に雪崩で出来た草原、雪崩草原や雪の田んぼと書いて雪田、そこに栈敷地と植生地帯が縞状に配列されていて独特の景観を生み出している、いい形で自然が残っているところが多い。固有種を含む山頂部などですね、積雪の少ない、乾いた場所の存在。これは乾性草原と言いまして新山の上部に暖かい、風が強い場所がありましてその場所に固有種とか珍しい高山植物が沢山あります。最近だと登山者が増えておりますけれども、他から見てもまだ荒らされていない。ただ油断していると危ないと危惧しているところなんです。それから鳥海山の大きな特徴として火山の問題があります。鳥海山の火山活動が始まったのは今から200万年前、200万年という数字は私が生きている70年間で計れる数字では無いですけども200万年前から1万年前に及ぶ第4期更新世という地質時代に始まって、初期の火山帯が構成されて来たわけです。最初は西鳥海火山帯といって先程言いましたお花畑です、そこを噴火口として始まって行く訳です。そこから象潟周辺の火山帯から最後に東鳥海火山帯、要するに今ある新山、鳥海山の後ろにそびえる新山、東鳥海火山帯こう言った状態で形成されて来た訳です。東鳥海は馬蹄形に形作られていますがその中に中央火口口である新山がある訳ですこれが最も新しい火山の形なんですけども火山活動で出てきた鳥海山はその後どういう歴史を繰り返してきたかというところとざっと見てみますと記録に残っているのは、8世紀782年頃から始まって火山活動が見られるんですけども日本記という古い記録の中に初めて鳥海山の噴火の期日が見えてくるわけです。これは782年ですから今から1,300年以上前です。1,300年位前位の活動の中に日本記に「鳥海と言う山あり 山の上に火あること3年」何故か鳥海山と言う文字が出ている。古くからあった名前だったようです、9世紀から10世紀頃にかけてご存知のように大和に日本の政権がありましていわゆる大和朝廷がどんどん東に北に勢力を伸ばして行って日本全国を統一しようとしていた時代です。その大和朝廷が東北を平定するため派遣したのが有名な坂上田村麻呂ですね、そんな時代です。その頃秋田・山形、出羽地方には蝦夷といわれた地方人がいて戦を繰り返しておって、しかも鳥海山が噴火を繰り返したという事で非常に世の中が自然も人間も社会も荒れていた時代であった。そこで朝廷は、鳥海山が噴火するのは我々人間がやっている事の悪い事に対してじゃないかという事で鳥海山に位の高い神格を与えて山を沈めようとしたわけで、そこから鳥海山の神格が上がってきたわけです。記録にも鳥海山が大噴火を起こして白雪川に灰が降り、魚はことごとく死んでしまったと記述があります。鳥海山に朝廷から大物忌神社(オオエイ)が祀られる訳ですけども、この大物忌神社に当時の国家から相当高い位の神格が与えられて、月山とか葉山とかに並ぶ出羽一頭の地位を獲得する訳です。その後ですね、700年以上殆んど噴火の記録が無いんですね。無かった訳ではないんでしょうけれども、記録が途切れます。江戸時代にはまた、度々噴火を繰り返しています。寛文2年の1669年から始まって、芭蕉が象潟に遊んだ元禄2年、1689年という年、この事はまだ芭蕉の奥の細道にもあるように、象潟は九十九島があって八十八夜、非常に松島以上の風光明媚な所であったと言うふうに言われた所ですね。その後は1600年代から1700年代、時々噴火しまして、元文5年1740年、1740年の5月に山頂が噴火し、東西300件、南北80件が焼けてしまった。噴火が絶えずそこへ焼けぬけたと言うふうに書かれている訳です。この時に硫黄と明礬の泥水、泥水が湧き出した、言うふうな記録が1740年、元文5年の記録にある訳ですね。その後5,60年位たって、有名な享和の大噴火と言うのが有る訳です。享和元年、1801年です、1801年今から200年ちょっと前ですけども、その享和の大噴火って言うのが、今最高峰になっている新山ですね、新山は別名享和岳って言います。この享和の大噴火によって出来たのが新山なんですね。だから昭和の新山のように享和

新山になった訳です。ここで新山が最高峰になって誕生したと言うふうなですね、その直後4年後の文化元年の象潟の大地震です。この時に象潟の潟が陸地になってしまったって言うのが文化元年1804年ですね。それから天保5年って言うから1834年、これは天保の大飢饉で有名でありましたけれども、この天保の噴火の時には白雪川の左に硫黄が流れて魚が殆んど死んでしまったと、その後5年も魚が住まなかったと言うふうにかかれてはいます。昭和49年、皆さんの記憶にも残っていると思いますけれども、要するに昭和の噴火がございましてね、これは噴火と言うほど規模が大きくありませんでしたけれども、この時には153年ぶりの噴火って言うふうに新聞、テレビ、報道機関賑わしたけれども、この153年ぶりの噴火と言うのは、昭和49年、1974年から遡っていくと文政4年の1821年になるんです。天保の噴火の前にあった文政4年の1821年の噴火から数えて153年ぶり。実は天保5年の噴火もあったと言う事ですね。昭和49年の鳥海山の昭和の噴火ですね、その時は非常に雪の多い年で、秋田市でも117cmと言う最高積雪を記録している訳です。大雪と関係あるか分かりませんが、いずれそう言う年であったん



ですね。また49年の昭和の噴火が起こった頃ですね、鳥海山の周辺で何が起こっていたかと言いますと、その前後から山の全体にですね、大規模なブナの伐採が行われていた。それから秋田県側の北東斜面、今、矢島コースですけども、北東斜面にゴンドラを設置すると言う、そういう計画が出て非常に世間を賑わした事なんですけれども、そういうブナを切ったり、観光用にゴンドラを設置するとかと言う、そういう事を計画した、そういう段階におそらく鳥海山の神が怒って噴火したのではないかと言うふうに見られる訳ですね。そういう鳥海山の噴火の歴史が過去にある訳です。鳥海山のこういう噴火系が、あるいは先程言った氷河の名残り、あるいは高山植物の部分、色んな顔を見せる訳ですけども自然現象があると言う事。ここは降水量が非常に世界的にも多い所なんですけれども、先程も申し上げましたけれども降水量だけじゃなくて晴天率が、降水量が多いので晴天率が非常に低い。晴れる日が非常に少ないと言う事ですね。だから私も年何回も登ってますけれども、本当に晴れる日って言うのは確率どれ位でしょう、プロ野球の打率3.4割までは到底かないと思います。まず2割台で無いかと言うふうに、それでも運が良ければの話ですけども、非常に晴天率が低い訳であります。日本海に直接面している為に、非常に風当たりが強い、だから生易しい山じゃ無い訳ですよ、実際登ってみても、例えば駒ヶ岳から登ったとしましょう。駒ヶ岳から神社まで登る。神社から上に行くと、ちょっと風が強くてまともに歩けない位風が強いです。猛烈な風が海側から吹き付けてきて、庄内側の方から猛烈な風が吹き付けて、まともな登山が出来ない位、そういうことがしばしばあるわけです。これは真夏でもそうです。真夏でさえこうですから、もうちょっと早い6月まだ残雪の沢山ある6月とかですね、それから9月の末でもうそろそろ雪が降るかなって言う頃になると、まず普通の人ではそういう悪天候に見舞われたらちょっと動けない厳しい状況が実際ある訳ですね。それ位その気象条件の厳しい山であると言う事はまず、はっきり覚えておかなければいけないと思います。それから次にですね、山岳信仰と登山という事で言いますと、先程言いましたように、鳥海山は月山と並ぶ、出羽一頭の神の山という存在です。ここは古い歴史を、開山は天武天皇の御代の修験者「役小角(えんのおずぬ)」と言われてますが、勿論信仰の歴史を持っております。中世から江戸時代にかけて修験道が大きく発展した山でもあるんです。けれども修験者、多くの行者がですね、山の頂上に修行する為に沢山通ったと言うふうになっておりますけれども、この行者道が発展したのは鳥海山は庄内側の蕨岡口と秋田県側の矢島口がまず主に代表的な行者のコースでして、矢島側の方では、私は秋田県側の方だいたい主に話しますが、矢島側でもかなり盛んにそういう行者の登山が行われたんですね。矢島側の方では行者と言わないで、道者と、道の者と書いて道者ですね、道者と言うそうです。そういうその修行する道者が登った道が道者道で、それで途中2合目の神社の辺りで、道銭を取ったそうです。要するに登山料ですね、通行料みたいなものを取って、それで元締めが集めていたと言われてます。この鳥海山の修験道ですね、江戸時代になって争いがありました。蕨岡の方、大物忌神社のある方が本峰と言って本来の表道といいますが、矢島側の方は逆峰と言ってこちらも行者の信仰を集めた、本家本

元である長野の登り方があると言う事になるんですね。矢島の方の場合は逆峰修行と言って、1合目から2合目3合目って言うふうに登ったと。おそらく蕨岡も同じだと思いますけれども、矢島側のコースでは行者道は5合目の祓川に来ると、綺麗な流れが、冷たい流れがあってですね、そこで水を利用して身を清めたんだと言う、そこでは麓の土を山に上げない、帰る時は山の土を下に下げない、そういうルールで草鞋を履き替えたと言う事なんですね。祓川神社の前にはそういう履き残した草鞋が沢山あって、それが山のように積まれて、あそこが草鞋塚と言うふうに呼ばれていたと。そういう場所が近年まであったんだそうです。今祓川神社の建物も無くなってしまいましたけれども、つい最近まではそういう祓川の神事と言いますか、そういう信仰の場所として祓川コースに行けば、下の方からですね、登山道、1合目に矢島の登り口から登って行く1合目に、非常に鳥海山が真直ぐ見える、池と一緒に見えて風光明媚な場所があるんですけども、その1合目から始まって、2合目がキザカイ、3合目がクマノオウジ、4合目がゼンジン、それから5合目が祓川とありますけれども、この辺僕が最初に登った35年、昭和35年頃ですね、まだブナの樹林帯が茂っていました。3合目の大杉も健在でした。この頃はブナの森が鬱蒼としていて、矢島の駅から全部歩いて、祓川まで行くのが一日、それから次の日頂上まで行くのが一日、頂上下りるのが一日、帰るのが一日と二泊三日無いと鳥海山に登れない訳です。こう言うその昔の歩いた人達のように、山の下からですね順番に上に、1合目、2合目、3合目と登って行くと、この鳥海山の状態が良く分かるんですね。どういう山であるだとか、今は殆んど車ですぐに行ってしまうので5合目から下、6合目コースの場合も殆んど半分捨てられたような状態で、昔の物が残っていないような場所が多く見られます。こういうものを見直して、昔の修験者の登った山道を見て頂ければ良いかなというふうに思いますよね。祓川から言った場合は、祓川から賽の河原、それからウタ、長良川それからシマダと行きますけれども、こういう昔の中に登山道の地理も大事にして行きたい事だなと思う訳ですね。こういう自然道の山がですね、だいたい大正昭和に入ってからだと思いますけれども、要するに、純粋に登山をスポーツとして楽しむふうな、いわゆる近代登山の波が鳥海山にも来る訳ですね。こういう雪の多い山ですから、春スキー、月山は夏スキーが有名ですけども、鳥海山の春スキーも人気のある山なんですよ。こういうその、信仰とか関係なく純粋にスポーツとしてこの鳥海山の山を楽しむ、いわゆる山登り、あるいは山スキーですねこう言った、楽しむ為のフィールドとして鳥海山が、注目されるようになった訳です。その後各地5合目付近まで車道がどんどん伸びて、道路状況が良くなるに従って、この山も形態も徐々に変わって来ている訳ですね。それで、これから三つ目の課題であります、鳥海山の現状ですね。現状と、どういう状況の元で、どういう問題点が発生しているかという事を、ちょっとこれからこの後のディスカッションの問題定義も含めまして、そういった状況をですね、ちょっとお話して行きたいと思います。鳥海山には今皆さん登られている方も沢山おられると思いますけれども、ここ数年ですね、何年位前からなんでしょう、日本百名山と言う本が出たのが1964年ですね、64年ですから今から40年前、この本が出版されて凄く人気が出たんですけども、この本が出た頃は百名山と言うのがまだ全部登った人はいなかった。しかし何故かここ20年位前からでしょうか、山から若い人が居なくなって、だんだん中高年、お年寄りの人達が山に目立ち始めて来たっていうのが、20年程前からだと思いますけれども、そう言う、いわゆる中高年の登山ブームに従って、この日本百名山と言うのが大きくクローズアップされてですね、要するに人間の心理として50あれば50全部登りたい、100あれば100全部登ってみたい、こう言う一つの数字的な、いわゆる数字目標と言うものがあればですね、それを達成したいと言うのが人間の自然の心理でもあると思います。そう言ったいわゆる一つの百名山ブームが生まれる訳ですけども、これによって日本の山に対する見方が、見方、取り組み方が大きく変わって来たと思うんですけどもね。まず年代順に、中高年の方達が圧倒的に多くなって、若い人の姿がだんだん減って、また昔のような山岳部、山岳会というような組織系統的なグループが減るんですね。逆に皆で渡れば怖くない的な大人数による団体登山、ツアー登山が非常に増えてきました。これは色々な条件があるんですけども、一つは商業ベースもありましょうし、あるいは仲間意識の強い集まりで、グループでバスを調べて一つの山に行くと言うふうな傾向が非常に強くなってきました。これは終戦後、登山ブームが一時ありまして若い人達がみんな山へ山へ、と言うふうに向かった時期がありました。これはちょうど僕らが山登りをしていた昭和30年代の頃だと思うんですけども、有名な井上靖の氷壁と言う小説が、ベストセラーになって、あの小説が非常に起爆剤になったみたいな形にですね、若い人を惹きつけたと言うふうな、そういう事もありました。それと若い人達が山登りじゃなくて、旅行ブームみたいな形で色々な所に行くと。そう言った事から自然に触れる気

概が若い人達に広まったと言う事。今のこの中高年の登山のブームと言うのは、そんなふうにならうと言う最初のですね、登山ブームを経験した人達がそのまま年齢が上がって、今の中高年になって行くと、だと思っただけでもね。だから山に行く人達は基本的に、同じ年代が上がっただけで同じ人達が取り組んでいると感じている。こう言う形で、中高年の方達を中心にしたという登山がですね、百名山含めて、山が増えてきますと、当然山のこういう状態も変わらざるを得ませんよね。登山コースとか、それから山小屋とか、そういう登山者が利用する場所の変化と言うものが訪れていきます。百名山による人気のある山って言うのが、やはりどうしてもコースの荒れ方がひどいです。これは全国何処でも同じ事なんですけれども、そういう人気度の高い山って言うのは、登山コースが荒れて、山小屋が混雑して、とても快適な登山が出来る状況じゃ無いって言う部分もある訳ですね。それで鳥海山はその中に含まれている所です。そこで登山道、昔のような道は殆んど無くて、例えば駒ヶ岳から登って見ますと、もう最初から頂上まで殆んど石段を登るみたいな感じになってしまいましたよね。だから足に優しいクッションの効いた山道と言うのがまず、今殆んど望めない状況です。ただそういう、一極集中的なその形態が山の中にあると、鳥海山じゃなくて、じゃ他の山はどうかと言うと、結構静かな山もあるんです。殆んど人気の無い山も結構ありまして、どうしても名前の有名な山に行きたがる、これはもう人間の心理上かも知りませんが、そういう傾向が非常に強い訳ですね。だから鳥海山一つとってもみてもですね、全てそのような訳じゃなくて、非常にそういうふうな登山者が集中する、人気がある訳じゃないでしょうけれども、比較的安心して歩けるコース、あるいはちょっと難しくて難儀はするけれど人に会わないコース、色々ある訳ですね。だからこう言う一極集中的でなくて、もうちょっと慣らしてですね、慣らして全体的にバランス良く登る山の在り方もまた、違うんじゃないかなと言うふうには、自分ではそういうも登る度に感じています。自分が最初登った頃の鳥海山って言うのは、基本的に駅から駅まででした。高校時代も殆んど登る時は、駅に降りて大物忌神社の階段上り下りするのが第一歩でした。大物忌神社の階段を登って、それから1合目へとと言うふうには5合目まで登って頂上を目指した。これはあの、高校時代毎年恒例の事でしたけれども、11月ちょうど今よりもうちょっと早いと思いますけれども、山が新雪に覆われる頃ですね、土曜日のお昼学校終わって、それで午後から一番、午後一番の電車で飛び乗って、駅に来て、降りて、それで暗くなって、懐中電灯をつけて歩いて、夜の10時頃に山小屋にやっと着くんです。小屋に入って23時間仮眠します。仮眠して2時から3時の間にまた出発して、オハマから登って、頂上越えて矢島コースに行きます。その当時は車も当然ありませんから、矢島の駅まで歩きます。日曜日にも一生懸命歩いて歩いて、それで夕方6時ちょっと前に、矢島線の最終の列車にやっと間に合って乗って行く。一日半の行程で、駅から駅まで歩いて、その頃はバスなんて乗らして貰えませんでした。歩んだ、ということでこの事は鮮明に記憶に残っている訳ですね。そう言うその、あまり昔の話ばかりするとあれですけども、山の形態は明らかに変わって来ていると言う事。それから山の形態が変わって来ると言う事はどういう事かと言うと、登山形態、登ってくる人のスタイルがだいぶ変わって来ている。登り方が変わって来ていると言う事。これは一番最後にまずこの観光登山の所でお話しようと思っておいたけれども、いろんな分野ですね、カテゴリーが、分野なんかはもうはっきり分からない。旅行なのかハイキングなのか、トレッキングなのかツアーなのか全然まず区別がつかない、みんな一色単になっている。一番肝心なですね、鳥海山を登るような、こう言う高い山、厳しい山に対する登山と言う概念が一番薄れてしまってますね、鳥海山でさえ今もうトレッキングと言う、耳障りのいい言葉で括られてしまっている様な状況になっている所なんです。だからこう言うそのトレッキングみたいな言葉は最初は、ネパールのトレッキングと言うふうにはですね山や川を歩く、旅をする意味で使われたのが、皆さんが最近ではトレッキングって言うんです。これは基本的に歩くという事を意味するんですけども、こういうトレッキングと言う言葉が従来の登山とか山歩きが変わってですね、一つ、言葉の部分として、人よりも言葉が先に歩いて行くような、そういう傾向になってきている所です。ただそういうその山形態が変化して来ている、それから勿論、道路整備の状況も変わって来ている。それから便利な物を利用してより快適に、短時間で山を楽しもうって言う、そういう登山者側の意識も大きく変わってしまいました。昔は尊敬の代表みたいなものでしたけれども、今ではちょっとした山に行くとか山小屋にシャワーが付いている、そういう山も沢山増えて来ている。中央山脈なんかシャワー位は当たり前です。それなりの料金でサービスすると。そういうその中央山脈辺りのサービスのいい山小屋なんかで馴れて来た都会からの登山者、例えば鳥海山辺りに来ていると、山小屋といっても比べ物になりませんよね。料金は山小屋だけなんで、それはそれで良いんでしょうですけども、大きな問題点は

やっぱり何処にいてもそうなんですけれども、多くの人達が山に登るって言う事は、多くそれだけの人間が山で排泄行為をすると言う事。これはもう避けて通れないですよ。年配の大人達がどうしても割合として増えてきますと、トイレの問題は、何処でも困った問題として出て来る訳ですね。私もいわゆる、中高年の方達と山を歩く機会がありますけれども、とにかく車に乗ってから着くまで、止まるたびにトイレに行くと言うふうな、もう犬の散歩状態ですよ。そういう中です。山に行ってもやっぱりトイレって言うのは非常に重要な問題になってくる訳です。鳥海山に登った方は勿論分かるでしょうが、山頂の神社の上と言うのも最悪ですよ。もう入りたくないって言う人が多い位ですね。だけれども登った人はそこでやっぱり排泄行為をしている訳です。だからこういう問題をそのままにしてですね、ただ登山者を増やすとか、鳥海山は綺麗な山だとかなんとかだとか言ってばかりいてもですね、この鳥海山の魅力と言うのが全然生きてこない。だから解決しなければいけないと言うその、問題って沢山あると思うんです。この後の話し合いの中にもいろんなものが出ると思うんですけれども、自分が鳥海山にお客さんとかです。ガイドする場合、自分の基本的なポリシーとして必ず守ってるものがあります。それは何かって言いますと、大人数の団体登山を迎えるのはお断りすると言う事。これだけは自分として守っています。自分がガイドして、山登りを説明して、山登りをきちんと理解して頂く為の理想的な人数はどれ位かと言いますと、自分としては5人以内です。5人以内の人数で、できれば1人か2人が一番いいんですけども、まず多くても5人以内の人数でガイドして、山登ると。そういう少ない人数であれば、天候が悪くなった、なにか不測の事態があっても、対応を一人が迅速に出来る訳ですね。これがだんだん人数が増えてきますと、そういう度にね、非常に難しい問題が発生してくるという事。まずこれも簡単なハイキングとか森の中を歩くだけだったら、まだいいかもしれませんが、大きな事故に繋がる可能性がある訳ですね。鳥海山のような非常に天候が厳しい山においては、特に気を付けなければいけない問題かと思えますけれども、先程言いました物凄い風が強くて歩いてくるとですね、雨は上から降ってきません、下から降ってきます。足元から吹き上げるような雨が来ますので、何とも歩けない状況になる訳です。それでも僕らは殆んどそういう時は止めるんですけれども、予定を組んだ30人クラスの規模のですね、ツアー団体と言うのは、頂上に予約してあるからどうしても頂上に向かわなければだめだと言うふうに、そのまま風の中登って行くんですよ。だから1、2人死んでもおかしく無いと言う位の状況の中での、やはり決められたスケジュールに従って行く訳ですよ。鳥海山はスケジュール通りに行かない山です。そう言った事を絶えずですね、この山に関しては、他の山とは違うんだという、はっきりしたものをですね、常に認識した上で、どういうふうにしたらこの鳥海山の魅力をですね、自分の物にする事が出来る、そういう課題がこれから解決しなければいけない問題だと自分では思っております。自分でもガイドをいろんな案内時々しますが、中々やっぱり集団的なグループに会って見ますとね、個人と違って集団になると、非常に人間って言うのは不思議なもので、態度が大きくなったり、怖いものが無くなったり、いろんなそういう性格の変化を見せて来るんですよ。普段いい人でもそういう中入ると、そうでなくなる人も出て来る場合もあります。だからそういう人間の心情の変化とかを当然考えていけないでしょう、一番理想的な鳥海山への取り組み方・登り方は絶対あるはずなんです。これだけ素晴らしい山ですから、やはり幾らでも多くの人に、この鳥海山の素晴らしさは、受け止めて貰いたいと思うんですけれども、その為にどう言う努力をしたいか、これは山岳に暮らす人達、あるいは山にかかわる達にとって、非常に責任大の課題ではないかなというふうに思う訳です。そういう理想的な話をする為にこの後色々皆さんからお話出ると思いますが、この後の話の中にもちょっと自分なりの意見をちょっと述べてみたいと言うふうに思っております。話がだいたい予定の時間となりましたけれども、最後にですね、もう一度冒頭で見ました鳥海山の写真を、ちょっと今の話と照らし合わせてですね、ご覧になって頂いて私の話しの後半にしたいと思えます。じゃ写真お願いします。これが先程お話しした笹が岳の方の花畑ですけども、これと向こうの方に沢山雪見えますね。これが要するに大きな氷河地形のですね、鳥海山の特徴ですね。豊富な残雪によって育てられたお花畑、これが火山によって出来た岩と、それから豊富な積雪によって作られた自然、こう言ったものがちょうどいい、一番高い所まで行かなくてもこういうその綺麗な場所って言うのは短時間で言うか、2時間かそれ位で行ける訳ですよ。こういう場所もあると言う事です。この鳥海フスマ、最近だいたい数が増えてきていると思います。これが非常に強い花でして、もうちょうど一番風が強い所ですね、岩陰にびっしり咲いていますけれども、登山者が増えてきますと結構踏みつけられて、無くなってしまふ所もある訳ですね。これは鳥海山フスマですね。これが一番頂上から北の斜面、これは多分矢島コースの上の

方だと思いますけれども、この黄色は何でしょう。これが頂上に近づくに従って、もう百花繚乱と言う感じで花畑が広がってくる訳ですね。これは中々見応えがある物だと思います。こう言うふうには沢山の登山者が来ますと、右側の下にトイレがあります。トイレがありますけれども、行った人はまず間違いなく、殆んどトイレに立ち寄りと思います。だから僕が山に行くと沢山の人の行列を見ますと、あゝ皆垂れて行くだろうと言う、すぐそっこの考えに及んでしまうんですけど、そういう大きな問題があります。美しい景観の裏側にいるんな問題が含んでいると言う事。美しい景色を見るだけが山登じゃない、と言う事ですね。これが一番古い火山の形態。ここにちょうど大物忌神社があるんですね。こういう厳しい中にある山小屋です。だからこう行った所で快適を望むと言うのは所詮無理な話です。出来れば、多くの人達は山頂登らないで、朝早く出て、早く下りて行くと言うふうな、そういう山に配慮した登山の形態を取るべきではないと考えています。これがあの、ガスが沸いてきていますけれども、まだ山が見える状態です。山が見える状態ですけれども、これが一旦天候が悪化して、濃い霧に包まれますと、どう言う状況になるかと言う事をちょっと想像してみてください。道はこの尾根の上の方に、こっちの方にありますけれども、はっきりした道になっている所もあるし、不確かな道、分かれ道がいっぱいあります。非常に迷いやすいです。春、残雪のまだ残っている時期だと殆んど雪渓の所で迷ってですね、痛ましい事故も毎年のように起こっております。ただ山はこう言うふうには天気のいい、条件のいい時ばかりじゃない事をまず、肝に命ずる事が大切かと思えます。影鳥海が見られますけれども、こういう自然現象の一部と言う事ですね。山はやっぱり自分で鍛錬して、夜でも昼でもこの山を歩けるって言う位の、力をつける事が大事だと思います。これも影鳥海ですね。こういう麓のやっぱり景観のですね、ただ上を目指すんじゃなくて、登る過程とかですね、こういう森林の景色も見ると言う事が大事だろうと思います。このブナの大木は鳥海山の噴火の歴史とも長く付き合ってきた訳ですので、そういう大きな自然の変化とですね、こういう樹木、あるいは植物の変化、そういう状況も良く観察する事が大切かと思えます。以上で今日のお話、問題定義も含みますけれども、この後、残った過程については、ディスカッションの方でちょっと話したいと思えます。これで基調の話が終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

司会

どうも有り難うございました。会場の皆さん、もう一度藤原様の方に盛大な拍手をお願い致します。それではここで10分程休憩に入らせて貰います。次はですね、2時30分からパネルディスカッションを行いたいと思えます。

パネルディスカッション「これからの鳥海山観光を考える」

司会者



本日のパネルディスカッションにつきましては、鳥海山観光として、これから発展させて行くには何をすべきか、先ほど藤原様の講演の中にありました理想的な登り方、この辺の話につきまして、それぞれの方々からご意見を出し合ってもらいまして、皆さんと共に考えて生きたいと考えております。それではパネラーの紹介をさせていただきます。

先ほどの講演のお話を頂きました藤原優太郎様です。続きまして山形県八幡町の鳥海山山岳ガイド協会の芝田肇様でございます。前山形県自然公園管理員の畠中博様でございます。続きまして東京からお越し頂きました東日本旅客鉄道株式会社東京支社誘致事業部担当課長の堀本様でございます。そして、コーディネーターは山形県遊佐町鳥海山観光ガイド協会の今野一也様でございます。それでは今野様パネルディスカッションの進行につきまして宜しくお願い致します。

今野

今野と言います。よろしくお願います。自己紹介と活動についてお話し頂きたいと思えます。順序は芝田さん、藤原さん、堀本さん、畠中さん、この順序でお願い致します。

芝田

私の方から自己紹介と活動内容を話していきたいと思います。鳥海山山岳ガイド協会の芝田肇と言います。山形県の自然公園管理員などをしております。私は昭和 38 年に山岳会に入会しましてそれから延々と活動して本当にありがたいものだと思っております。鳥海山があって私がある、と思っております。当山岳協会の活動についてご報告させていただきます。発足は平成 10 年だったんですけれども色々内容を変更しまして、今のメンバーになったのが去年です。旅行会社から依頼を受ける他、山開き、独自の山登り新緑や紅葉の時期の山登りをしております。それから私たちはガイドとして料金を頂いてガイドをしているわけですので当然、その所の問題が大きくなると言うのが現実であります。現在は弁当も出ておりませんが、来年からは弁当出したいな、それくらいの金額を出して行きたいなと思っております。メンバーとしまして 10 名で構成されていますけど依頼が中々、土曜日、日曜日と限りがありましてその人の確保が大変な状況であります。今後は平日も対応できるように人を補充していくと言うのも大きな問題だなと思っております。対応が早くて前の晩に電話来ても明日の登山にガイドを間に合わせるんだと言うことで鳥海山麓の連携が喜ばれている現実があります。そんな事で料金を頂いてガイドをするという事の大変さが身にしみて思っている状態です。これが協会の活動です。

今野

ありがとうございました。続きまして藤原さん改めてお話することがあれば、

藤原

改めて申し上げる事はありませんが、私は秋田県側を登る事が多くて、矢島コースですね。あとここ 3 年ばかり JR さんのガイドという事で 7 月に大平コースから笹が岳まで 5、6 人ばかりの少人数ですけれどもこれのガイドをさせて頂いております。とにかく私は鳥海山から生まれたと自負しておりますので、この山と一生付き合っていくと思っております。この後皆さんとも会う事もあるかと思っておりますけど、宜しくお願い致します。

今野

それでは続きまして堀本さんお願い致します。

堀本

こんにちは、ご紹介頂きました通り、会社が JR 東日本でございますのでご承知の通り、中越地震で新潟新幹線がまだ回復していませんで、只今会社をあげて一番早い復帰に取り組んでおりますので今しばらくご了承をお願いしたいと思っております。ところで皆さん、なんで JR がここにいるんだろうと思いかもしれませんが、国鉄から JR に変わった時、旅行業をスタートしました。「びゅう」と言います。私はその中で大人の休日センターというのがございます。大人の休日センターではこういう冊子を発行していますが、大人の休日、何であるかという事なんですけど皆さんおそろくジブングクラブはご存知だと思いますけども、これは昭和 60 年、国鉄時代でしたけどもこの時に発足した、言ってみれば高齢者向けの割引制度みたいなものです。その様なものでスタートいたしまして 62 年に会社が北海道・東日本・東海・西日本・九州に分社化した時、旅行業を始めました。キップの販売だけでは勿体無いという事でそういうお客様にこの様な商品を提供するという事で始めまして、もっと大々的にやろうと。そして 3 年前にジブングクラブのブランドとして「大人の休日」という事で出来ました。JR 東日本の会員は 185 万人います。冊子を発行しまして鳥海山が載っている関係で本日あります。お客様をお送りするものとして参加させて頂いております。色々話が出来ればいいと思っております、お願いします。

今野

ありがとうございます。最後に畠中さん

畠中

生まれは大物忌神社から歩いてすぐです。主催者の流れの



中で3分少々になりますけども、3分となりますと話す事が無いんですが紹介でございました管理委員会の中で平成15年から始めまして、柴田さんと同じくガイドもやりながら、年60~70回登っています。私が始めて鳥海山登ったのは小学校5年、家族が行者を案内する役目をしていましたので、それに付いて登ったのが初めてです。先程パネラー藤原先生の方からお話ございましたトイレの話がありましたが、私も幼い頃に見た強烈な記憶が鮮明に残っています。そして、2,3人で登るのが良いとおっしゃっていただきましたが、実際、私は20人から30人を連れて登っているんで耳が痛い、胸にズシンと来ました。そういう事も踏まえてこれからのお話をしていきたいと思います、どうぞ宜しくお願い致します。

今野

ありがとうございました。パネラーの自己紹介と活動内容ですが、皆様のお手元にあるレジュメでは藤原さん芝田さん畠中さん堀本さんとこの様になっておりますが実は自己紹介してもらった順序がこれから話をして頂く順序であります。藤原さんが秋田県側、柴田さんが山形県側、受け入れる立場の代表としておこし頂いております。そして堀本さんが送り出す側、そしてそれらを管理する立場の畠中さんという順序でありました。それでは最初、芝田さんの方から。

芝田

依頼を受ける側と言うのは断然中高年が多いので、ゆっくり無理のないようにガイドするようにと心がけているんですけども2,000mちょっとありますし、コース的にも整備されていれば別ですが、自然道となるとだいたい9時間から多い日で11時間くらいは延々と歩かなければならないと言うのが現実でございます。一番問題になるのはせっかく遠くの山に来たからという事で月山とか色々な山を梯子して来るのが非常に多いのが現実であります。そんな時に是非お願ひしたいのは鳥海山に一番最初にきて欲しいのが現実でございます。一番先に来て欲しい。あと、2,3人で登ると話がありましたけど、本当に耳が痛い。私も普段は1人で登ります。ただ、ガイドとして看板上げてますので、どうにも行かない。でもうちの規定で8~10人は1人のガイド。それ以上は2人目という風にしてますが予算の関係上、1人で良いと言われる。ただ、アクシデントが起こった場合どうするかと。是非、10人以上の時はず2人という事をお願いしたい。そんな所です。

今野

送る側に対して伝えたい事はありますか。

芝田

なにせ、中高年が集まるとパワーがあるというか、少しくじいただけで携帯でヘリを呼べと、こう来るんですね。山登りにきているのだからある程度覚悟もして欲しいし、耐えうる体力もつけてきて欲しいですね。宜しくお願いします。そう言うことを伝えて欲しい。あとは靴。必ず一人は登山靴の底がとれる。指導員なら色々道具を持ってますけど、山に登るなら自分の装備は自分で管理しないと。

今野

靴の話出ましたけど、私も東京で最初に言ったのが靴でした。履き易い軽登山靴がありますけど、雪に上がると命が危ないなと思いました。今度は秋田県側の藤原さん。

藤原

昨年の夏、7月20日海の日に連絡があって広島県から来るご老人たち3人ですが何とか鳥海山に登って行きたいと、山頂の小屋に泊りたいという事でガイドの方に要請が有りました。この方たちはその前の年も来ていわゆるビギナー的な感じだったんですけども、7月20日限定の鳥海山の頂上、まだ梅雨も明けておりません。この時、私はお客さんの要望でしたけどもまずそれは止めた方がいいと頂上へ登るのは良いんだけど、山小屋の状況がどういいう状況かという事は自分が一番よく分かっていたし、雨に降られて小屋に入ると言うのは悲惨なものでしたから、朝ちょっと早いけど、朝一山頂に行って降りてきて、快適な温泉に泊まったほうが良い、とご案内しました。お客さんの要望は山頂に泊まるでしたけども、僕の方から色々お進めして、矢島コースから山頂に行って麓に泊まるコースに変更させて頂きました。大変な凄雨の日でした、被川からカッパを来て登ったんですけども、意外と山が風を遮ってくれて登り易いんですね。結局七高山に登って麓に泊まったんですね。本の計画でしたら登れませんが

でした。次の日は晴れて中島平を経由して鳥海ブルーラインを通して笹が岳の花畑を見せました。お客さんはガイドブックに載っている所しか知りませんから臨機応変に対応すればいいと思います。少人数なら可能ですよね。あと北九州から来られた 76 歳のおじさんですけどこの方は毎年秋に登山のために来るんですけども、先ず一週間近く泊位して、2、3 回登るんですけども、他の人と一緒だと迷惑も掛かるしという事で、1 人で来て僕を確保して登ると。今回は 3 回登ったんですけども凄い元気な方で。あるとき鳥海山に登った時雪が降ってきました、これ以上登ったら危険だという事で降りてきた事もあります。一人ならそう言うことも可能です。団体のガイドを頼まれても出来ないという事で他の人に振ってしまいます、我儘なんですけれども、自分の能力では難しい山であればあるほど出来ませんとはっきり言います。秋田県側はこちらのガイド協会のように組織団体が私の知る限りありません。秋田県側のほうが難しいと言う噂もありますのでお客さんも少ない。百名山に書かれているコースがですね、どうしても庄内の山って言うイメージがあるようです。私は個人でやっていますし、紹介されてやっているのあまり意見としては参考にならないと思いますけれども、お客さんから問い合わせがあった時、正確な物をこちらから伝えてやるという事がひとつ大事な事だな、だから山に登る人からの問い合わせがあった時に他県の場合、特に皆さん白神山地に行きたいと言う人が多いです。白神山地に行きたいと言うのはもちろん世界遺産という大きな思いがあると思うんですけども白神に何故行きたいんですかと聞くと、ブナの原生林を見たいと。見られないですよね。そこまで行けません。じゃ、どこを見せるかと。人工の森も中に残った所をくると回って白神山地だとんでもない事をしているわけです。そういうことよりも、白神と言う場所を説明して、原生林は見られませんが、でも津軽の十三湖にある遊歩道、こちらを歩いたほうがずっと楽しいですよと、自分でコースを変えていったりします。少人数だからこそ出来る。鳥海山も笹が岳位で止めておけば丁度良いんですよね。それで、天気が良くて綺麗な花畑と鳥海山が見えると非常に喜んでくれるんですよね。いつも晴れてくれればな、と思っています。こういう活動をしています。

今野

今の藤原さんのお話で天気が悪ければ少人数ならコースを変えると、それは適切な事だと。ここで堀本さん、コースを変えると商品の変更になりますので送る側としてどうですか。

堀本

全般的な事から言いますが私共 JR 東日本と申しますけども東北地方から関東・甲信越までのエリアを経営してまして、鉄道利用の促進を図るために旅行業を行っていると言う一面を持っておりますので、特に北東北エリアのお客様の需要と言うのも私共一生懸命なんです。従いまして北東北へのマーケットも拡大したいし、北東北からのお客様も呼びたいしということで、私共の会社、本社の他に 12 の支社がございますけども観光開発というセクションを作りました。これは何かと言いますと今言った様な事をよく皆さんと密接にお話して観光開発を図っていきたいという事です。まだまだ機能的に十分ではありませんが、一旅行業者としてまして、よくガイドの皆様のお話を聞くと旅行会社はお客さんを送っていいのか送っちゃダメなのかこういう事なんです、こちらだけじゃない。実は今年 5 月頃ですかね、白神山地がやはり同じようなパネルディスカッションをやったんです。やはり現地のガイドの皆さんが同じ様な事をおっしゃるわけです。旅行会社はお客様が欲しくないんだな、ところが実はそうじゃなくて送る側と受ける側の調和と言うのが大事だと思います。ここで 2 つ大事な事があります。1 つは地域の皆さんには自然を守る、大変な財産ですよ。鳥海山は昔と比べればという事があるんですけども自然を守るという事がいかに大事かこれは白神山地も同じでやはりお客様は増えたはいいけれども荒らされては困る。ある程度のお客様は欲しい、しかし自然は守りたい調和だと思うんです。そこで 1 つは自分の所で一生懸命自然を守ろうと言っても限界がある。旅行業者は送りたいし、観光施設はどんどん来て欲しい、山なんか荒れても関係ないと。そう言うところを良く話し合っ、お互い良心を持って、無理なら無理と断る勇氣も必要ですよ。後は地域の方にも協力してもら、秋田・山形県、行政の枠を超えて行動するという事です。2 つ目は安全の確保です。ツアーですと 3、40 人になる。安全を考えると 6 人は必要だよと。でも費用の問題もありまして、一人で良いと言うふうでした。最近、私共はガイドの人数を増やす様にしております。実は前に怪我人が出まして、転んで出血したんですが、自力で降りられないと、その時たまたまパトロールの方がいらっやって、無線でヘリを呼んでくれたんですね、岩手県警のヘリでして経費がかからなくて良かったんですが、民間のヘリだったらと思うとぞっとしまして。今は 10 人に一人は付けるようにしています。

今野

大変ありがとうございました。鳥海山の自然公園としての観光客とどう言うことがあったか、またして欲しいかありますか。

畠中

先程言われたツアーで来られる方2、3人の小グループで来られる方もありますが、お客様の中で2、30人になりますと中にはやはりマナーを守らない人がいらっしゃいます。どうしてもツアーで来ると事前に他の人の顔も知らないし交流も無い。そう言う状態で、山に対して知識経験積んだ方もいれば始めてくる方もいるので、コミュニケーションが感じられないんです。そう言うツアーで来るってのは草の上に乗ってカメラを撮ってみたり、岩の隙間に突っ込んで撮ったりと。そう言う方が多いのでツアーの前に講習会を開いて欲しいと思います。なるべく講習はしていますが、行き届いていないのが現状です。色々な目的の方が集まってくるのでガイドも付かず添乗員だけで登ってくるのは、ぞっとします。管理員は3人しかいないので、全部見るのは無理なのでガイドを付けて下さい。あと1つコース石畳で足腰に来ます、確かに。でも石畳にしないと登山道を外れてあちこち歩くんですね。花や木を踏んだり。足腰には悪いけどそうせざるを得ない現状です。あと今、素晴らしいカメラを持ってられる方が沢山います中高年で。ところが山の装備って言うとビデオばかりって言う方がいますので。あとそういったツアーの方で柴田さんもおっしゃいますけども確かにこの山、簡単なものではないと思います。最低でも10時間かかります。夜行バスで来て朝の5時から登って、麓に降りて下に泊まって、次の日月山に登る。65歳の人にとっては大変きついのではないかな。足を挫いたり、痙攣を起こす方がいっぱいいます。こういうときは近くの山小屋と連絡をとって休ませますので密に連絡を取って山形同士のコミュニケーションも取らなければ、と思っています。あと植物の保護に監視ましては高山植物のインストラクター制度を設けてかなりの数が巡回しています。登山客の事故に対しても対応できるように整えつつあります。自然公園の利用の適正化、なんてありますが藤原さんがおっしゃった、雨の日の山頂の山小屋なんて悲惨ですよ、本当に。事前に地元の観光協会なり、山小屋に天気を確認してもらって着ていただくのが良いと思います。お客さんに良く訪ねられます、更衣室も無いのか、不便だなと。私は不自由さを楽しむのが自然ですいつも答えます。あとトイレの問題もありますね。間口が広くて怖いとか色々言われます。不便だ、汚いのも分かりますが、ご理解頂いて利用して欲しい。あと行政からの協力、救助ヘリなどですね、年間かなりの金額かかっています。その辺をご理解頂きたい。

今野

ありがとうございます。今、畠中さんの方からマナーの問題ですね。確かに私もガイドしながら歩いていますとゴミがあります。前に全国地汚い山、鳥海山って紹介された事があって、カラー写真で出た後、その山は無くなりましたけど。今年、友達と九州の山に登ってきて二つ感じた事があります。まず一つはゴミが少ない、もう一つは登山道の整備、私の場合登山道の整備とは何だ綺麗に登山道を広げて、さあいらっしゃい、風無くても涼しいですよ、ちゃんと草刈ってきちっとしてますよ、と言うのが必ずしも登山道じゃないと考えているんです。草を刈ってしまうとそこが歩きやすいので登山道から外れて怪我をする、という事が起きてる訳です。このことについて秋田県側・山形県側ではどうですか。

藤原

鳥海山の登山道については今野さんのお話にあった様に石畳の石なんか凄く歩きやすいです。登山者にとっては石畳なり、木造なり整備は必要最小限必要な事だと分かりますけども、無差別にどんどん増やしていくって事ではないと思うんです。そこは利用者との自然とのいいバランスを考えて、あとマナーと併合も兼ねて我々も注意して広げてゆく必要があるかなあと常日頃感じております。ただ、個人的な感想としては歩きやすいと思っています。歩きやすいってのは大事だと思います。

今野

柴田さんどうですか。

柴田

山形側は昔からの登山道です。見当つけて足を置かないとひっくり返るなんて事もありますが、これが本当の登山道だと思っています。石畳なんてのは登山道じゃない、というのが私の今の思いです。以上です。

今野

ありがとうございました。残り時間少ないですが、登山観光を持続的に発展させていくためにはどうした良いかと先程から少しずつ出ておりますが、一言ずつ堀本さんからお願いします、良いですか。

堀本

言った気がするんですが、山を目指す人は自然を求めるとい事が一つある。自然の求め方が人それぞれ違うという事を明確に伝えてやる事が我々には大事なのかなと思います。20人の団体がいたとします。先頭は登りたいからどんどん上がっていく、もう一つは一生懸命カメラで花を写真で撮っている。混在すると物凄く大変なんですね。募集するなら明確に山に来る目的は何なのか、分けるべきだと思います。後はマナーの監視ですね。人はゴミ落ちてる所にゴミ捨てる、綺麗な所にはゴミを捨てない、これは人間の心理、せっかくだから綺麗にしてよと。一人一人の意識、受ける側と受け入れられる側の調和が大事だと思います。後は安全面。後はお客様のレクチャーですね、この山、本当に登れますかと。だいたい2,3人は挫折しますが、少々厳しめに行く事も大事だと思います。綺麗な鳥海山を楽しく皆で登るツアーにしていきたいと思ってますので、今後とも宜しくお願い致します。

島中

鳥海山に来たいと言う思いと、鳥海山に来ていただきたいという思いがある以上、両者の思いは一致してるわけですから、来る方たちもきちんとした形で来て頂きたいと。そうして頂ければこちらとしても、ガイド協会ならガイド協会だけじゃなくて、全体である一定のラインを作るべきだと思います。その中でガイド協会、行政などが連携していければ、組織作りすれば結構やっていける様な感じはします。

芝田

県なり、行政なり、観光協会なりが業者と例えば、事前教育のような計画を立ててもらって私はその中に参加して最低限の気持ち出来て欲しいと。業者さんにも山は厳しいという事も知ってもらって、またこちらからも伝えていく事が大事だと思います。それから、こちらの方の問題ですけども私共は常に携帯電話を持ってあるんですけども何とか下との連絡はいつでも取れるような体制を取ってガイドをしております。そんなことも含めまして送り出す方としてもきちっとそう言う気持ちで送り出して欲しいです。

藤原

鳥海山のトレッキング観光を持続的に発展させていくためと書いてありますけどもトレッキング観光という概念、全く新しいもので自分ではとても理解できないものがあるんですが、大事なことは登山道とトレッキングという概念、考え方をはっきりして、厳しい鳥海山みたいな厳しい山には観光的な軽い気持ちで来る場所ではない、登山は登山としてはっきり自覚して向かわなければならぬ場所、単に精神的な問題の第一歩としておかなければならぬ問題だと思います。ここは鳥海山の将来的な発展を願う、新しいといいますが楽しい鳥海山の登り方ではなくて正しい鳥海山との接し方という捉え方でこの山を外からでも中からでも良いし、この山とどう接していきたいか個人個人の気持ちというものを大事にしたいと思います。皆が決めたからではなくて自分が何をしたいか、登山者自身判断出来る様に我々も含めて広げて、迎合していく必要があるとつくづく思いました。

今野

最後、私がまとめます。各町から色々資料をもらおうとそれが全部違う、なしてそんなに違うんだと、いつも思っていた訳です。これからはもっと鳥海山を取り巻く町や行政が連携していかなければならないと思います。これからの鳥海山の発展を推進していく第一歩になるのではないかと思います。大変申し訳ありませんが、これで私のコーディネーターの役目を終わらせて頂きます、どうもありがとうございました。